

## 問題解決型の道徳授業の理論と実践

### —道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育てる道徳の時間の在り方—

美濃加茂市立太田小学校 亀谷浩一  
 学校教育専修 柳沼良太

#### はじめに

本年度も問題解決をテーマとした道徳授業の開発・実践・省察を行う12年目研修を行い、小学校教諭3名と中学校教諭2名の合計5名を研修教員として受け入れた。本コースの実施方法と内容構成については、それぞれ本誌の第1号と第2号で詳述してあるため、以下には昨年までの実施内容と変更になった2点だけ記しておきたい。

まず、大学研修後のフォローアップを充実した点である。具体的には、大学教員（柳沼）が研修教員5名全員の研究授業を実際に視察し、その授業風景をビデオで撮影して記録し、第2回目の研修日（9月28日）で検討し合い指導することにした。ただし、授業実施が2回目の研修日に間に合わなかった事例もあったため、その場合は授業後に各学校で個別指導した。大学教員が実地指導で訪問したため、12年目研修のための研究授業を校内研修として位置付けたり（3例）、市町村の教育委員会の主催する研究授業と提携させたり（2例）した事例が目立った。その中で各校の校長をはじめ、道徳主任、指導主事、他多数の教諭と有意義な意見交流をすることができた。

次に、研修内容を補充・深化した点である。具体的には、研修初日（7月31日）の研修で問題解決型の道徳授業だけでなく、道徳授業全般の理論や方法を解説することにした。研修用のテキストとしては、例年活用する『問題解決型の道徳授業』だけでなく、『道徳教育の研究～生きる力を育む道徳指導法～』も追加で配本した。昨年までは、初日に最初の1冊だけ配布して、問題解決型の道徳授業の基本理念や具体的な学習指導過程を解説していたが、研修教員の中には道徳授業の基礎・基本から学びたいと希望する方もいたため、本年度から後の著書も用いて道徳教育の基礎・基本から解説することにした。また、研修教員の中には既にモラル・ジレンマ・ディスカッションや構成的グループ・エンカウンターなど様々なアプローチを実践・応用されていた方もいたため、それらと問題解決型の道徳授業との関連性について上述の2冊で説明した。

さて、本コースで実際に指導した事例については、すでに大学教員（柳沼）の立場から本誌の第3号で報告しているため、本年度は立場を変えて、実際に研修を受けられた亀谷浩一教諭に実践報告を以下にさせていただくことにする。研修教員が初日の研修を受け、道徳授業を具体的に構想し、1ヶ月後（8月24日）に指導案を提出し、その後で大学教員と共に数度のEメールや電話によって再検討を重ねて練り直し、実際に研究授業を行い、最後に事後指導を受けるに至る、という一連の研修の流れと具体的な研究成果をご覧いただきたい。

（以上、文責・柳沼良太）

## 道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育てる道徳の時間の在り方

美濃加茂市立太田小学校 亀谷浩一

### 1. 本研修コース参加の目的

間接資料を用い主人公の心情を読み取らせていく発問を中心にした道徳の授業を行ってきた。12年目研修の開設コースにあった「問題解決型の道徳教育の理論と実践」には、「児童が自ら課題を発見し、内省を深め、問題解決できるような道徳授業を構想し実践する」とあった。それは、今までの自分の道徳の授業になかった理論や技法であり、それを学びたいと考え本コースに参加した。

指導教員に理論を学び、共に考えながら道徳の指導案を作成し、10月に授業実践した過程を紹介する。

### 2. 指導案を作成するにあたって

#### (1) 児童の実態について

本年度、小学校一年生を担当している。児童数は28人の学級である。一学期間の児童の様子を見ていて、次のような児童の実態がみられた。

学校にクワガタやカブトムシといった昆虫を家庭から飼育かごに入れて持ってくる子が数名いた。休み時間には、飼育かごを数人が眺めたり、昆虫を可愛がったりする姿が見られた。また、初夏（6月）と晩夏（9月）に行った生活科の「いきものとなかよし」の学習で公園にいるバッタを捕ることがあった。大事に虫かごに入れ学校に持って帰り、休み時間にえさや、過ごしやすい環境を作るため、枝や葉っぱを拾い集めてくる姿が見られた。9月には、6月よりも大きくなったバッタの成長に驚く姿も見られた。さらに、四年生が飼育しているうさぎを観察したり、えさを集めてあげる姿も見られた。このように、子どもたちは、生き物の成長を楽しみ、育てることに喜びを感じていた。しかし、狭い虫かごに多くのバッタを押し込めたり、えさを十分に食べたうさぎにもっと食べさせようと口にえさを近づけ強要したりする姿も見られた。

そこで、このような児童の実態は、生き物を自分本位に可愛がり、生き物のことを考える力が乏しいことが原因であると考えた。そこで、道徳の時間を核として、今までの自分の可愛がり方が自分本位であったことに気づかせたい。さらに、本当に生き物を大切にすることは可愛がり世話をすることだけではなく、生き物のことを考えていくことだという心情を児童に養いたいと考えた。

#### (2) 資料の選定について

その様な、児童の実態から、資料に「すずめの赤ちゃん（出典：大阪書籍「しょうがくどうとくいきるちから1ねん」）」を選定した。以下に資料の概要と資料分析を記載する。

##### ①資料の概要

学校の帰り道、わたしは弱ったすずめの赤ちゃんを見つける。両手で暖めながら急いで家に帰る。ベッドやえさを作り、根気よく世話をする。だんだん成長し飛べるようになったすずめを、

このままずっとかわいがって飼っていきたいと、鳥かごの中に入れて、「ピー」という名前を付けて世話をし続ける。すずめが友だちと遊びたいだろう、大空を飛びたいだろうと言われ「はっ」とし、どうすればよいか悩んでしまう。

## ②資料の分析

わたしは、学校帰りに弱っているすずめの赤ちゃんを見つける。心配になり両手で温めながら急いですずめを持って帰り世話を仕始める。自分だけでは生きていけない状況にある赤ちゃんすずめを、一生懸命世話をし可愛がっていく優しいわたしの気持ちを感じ取る。

これ以上世話をする必要もないすずめを鳥かごに入れて、世話をし続けていくわたし。元気に飛べるようになって外に出さず、窓をしめた家の中で一緒に遊ぶ。そんなピーを可愛いと感じるあまり、ピーの気持ちを考えられず、自分本位に可愛がってしまう。そのわたしの気持ちが自分の中にあることに共感する。

友達のりかちゃんの一言で、ピーのことを考えなくなってきた今の自分に気づき「はっ」とする。ピーは「友だちと遊びたいだろう」「他のすずめたちと大空を飛んで遊びたいだろう」と思い始めるわたし。その姿から、かわいいから・一緒にいたいからと、自分の気持ちばかり優先するのではなく、生き物の気持ちを大事に考えていくことが大切だと気付いていく。

## 3. 指導案の作成について

7月末に問題解決型の道徳教育の理論について、指導教員より説明を受ける。その後、自校へ戻り指導案を作成し、メールにて指導案のやりとりをしていった。指導案作成の際、より多く指導をいただいた発問についてと、ねらいについてを決定するまでの過程を紹介する。

### (1) 発問について

#### ① 8月22日に送った指導案より（抜粋）

##### 展開前段

※ すずめの赤ちゃんを見つけるところまで読む。

T すずめの赤ちゃんを見つけたわたしは、どんなことを思っただろう。

C 世話をしないと死んでしまう。

→ベットを作り暖めてあげないといけないな。(体温調節)

→何も食べられないから、このままでは死んじゃうな。(えさ)

→私がお母さんになってあげないといけないな。

→飛べないから、車にひかれたり、猫に食べられてしまうな。(飛行、捕食)

そのままにしておかなくてはいけない。

→持って帰るとお母さんに叱られる。

このような展開前段の「発問と予想される児童の反応」をメールにて指導教員に提出した。

#### ② 8月27日に受けた指導より（抜粋）

例えば、主人公の「わたし」がスズメを見つけた後、「どうしたらよいだろう」と問いかけ

るやり方もあれば、友達の話聞いてハッとしたところまで読んで、「私はこの後、どうしたらよいだろう」と問いかけるやり方もあるかと思います。

前者の発問をした場合で考えますと、子どもたちの中には、「そのままにした方がよい」と答える子もいれば、「ケガが治るまで世話をした方がいい」という子もいるでしょう。その結果も考えるとしたら、「そのままにしたら死んでしまうかもしれない」とか「うまく飼育できないかもしれない」とかいろいろな意見が出るかと思います。そこで比較検討して、よりよい方法を考える手もあります。

また、後者の発問をした場合を考えますと、子どもたちの中には、「逃がした方がよい」と考える子もいれば、「そのまま飼った方がよい」と考える子もいるでしょう。

それぞれの理由を聞けば、「逃がした方がよい」と考える子の中には、「部屋に閉じ込めたらかわいそう」と優しく答える子もいれば、「世話をするのが面倒だから」と思う子もいるかもしれません。

また、「そのまま飼った方がよい」と考える子の中には、「かわいいから逃がしたくない」と自己中心的に考える子もいれば、「ピーは自分で餌を取れないかもしれないから、飼い続けた方がいい」と雀の気持ちで答える子もいるかもしれません。

それぞれの理由を聞いたり（どうしてそう思うの?）、その結果を聞いたり（そうしたら、どうなるかな?）することで、子どもの問題解決能力を豊かに養うことができます。

このように指導を受けた。私の作成した発問は、主人公の気持ちをたずねるものが多く、問題解決型の発問を取り入れたものではありませんでした。せっかくの大学での研修なので、問題解決型の発問を取り入れようと、再度指導案を作成した。

### ③ 9月8日に送った指導案と質問より（抜粋）

8月27日に指導教員より受けた指導のなかで、疑問に思ったことと、展開前段の発問で問題解決型の発問を取り入れた指導案を提出した。

#### 発問についての質問

展開前段の発問で問題解決型の発問を試してみようと思います。その際、色々な意見が出た後の、「比較検討して、より良い方法を考える」とはどのようなことなのでしょうか？

#### 展開前段

※ すずめの赤ちゃんを見つけるところまで読む。

T すずめの赤ちゃんを見つけました。どうしたらいいだろう。

C 世話をする。

→ベットを作り暖めてあげる。(体温調節)

→何も食べられないから、食べ物をあげる。(えさ)

→私がお母さんになってあげる。

→飛べないから、車にひかれたり、猫に食べられてしまうな。(飛行、捕食)

→大きくなるまで育ててあげたい。  
そのままにする。  
→持って帰るとお母さんに叱られる。

このような発問に変えることで、予想される児童の反応に「持って帰るとお母さんにしかられるから、そのままにする」という反応が予想されるようになった。児童の今までの経験や価値観をより多様に引き出す発問になったと感じた。

#### ④ 9月19日に受けた指導より（抜粋）

9月8日に提出した質問や指導案の指導を以下のように受けた。

ここでの回答を「比較検討して、より良い方法を考える」とは、例えば、次のようなことです。「世話をする」と「そのままにする」では、どちらがよいか。「世話をする」と、すずめは助かるけれど、お母さんに叱られるかもしれない。「そのままにする」と、お母さんには叱られないけれど、すずめが死んでしまうかもしれない。

さらに、もし「世話をする」としたら、どうすればよいのか。「ベットを作る」だけでよいのか。「食べ物をあげるだけでよいのか」、「何をあげればよいのか」、「そもそも変なもの(スナック菓子)をあげれば、すずめの赤ちゃんは死んでしまうかもしれません。」

「大きくなるまで育ててあげたい」という場合なら、「いつまで育てるのか」を少しだけ話し合うのです。

このように、「すずめの赤ちゃんをどうすればいいだろう」という問題解決型の発問をすると、そこから多様な子どもの回答が出てきますので、それらの回答を比較検討することで、どんどん話が広がり深まるのです。

比較検討で大事なのは、理由をたずねることと、その結果を考えることです。例えば、「お母さんに叱られるから、そのままにしておく」と答えた子に対して、「そうしたら、どうなると思う?」と結果を尋ねるのです。そうすると、「すずめの赤ちゃんが死んでしまうかもしれない」という結果の重大性に気づきます。

また、「大きくなるまで育てたい」と答えた子に対して、「そうしたら、どうなるだろう?」と尋ねることで、「人間に慣れてしまい、自然に帰れなくなる」という危険性に気づかせることができます。

もちろん、最初の場面でここまで完全に考える必要はありませんが、ここで少し立ち止まって考えることで、後で友達からの言葉が重くのしかかると思います。

今回の指導案の中心発問は、「友達の言葉を聞いて、どんなことに気がついたのだろう」ですが、これこそ問題解決型の発問にならないでしょうか?つまり、「友達の言葉を聞いて、わたしはどうすればよいと思いますか」とすれば、最初の1の発問とも連動しますから、一気に考えが深まると思います。

その後の「鳥かごに移したとき、ビーは何もできないすずめだったの?」、「なのに何で、鳥かごの中に入れて飼い続けなくちゃいけないの」(深めの発問)、「すずめはペットじゃなかつ

たよね。どこにも行かないでって、誰の気持ちなの」という発問は、素晴らしいと思います。見事です。こうした発問は子どもの問題解決を適切に援助できると思います。

#### ⑤発問の完成について

このようなやりとりから、以下のように展開前段の発問を決め、実践することとした。

##### 展開前段

※すずめの赤ちゃんを見つけるところまで読む。

すずめの赤ちゃんの写真を見せる。

T すずめの赤ちゃんを見つけたよ。どうしよう。

C 死んじゃうかもしれないから、連れて帰る。

そのままにする。

T ○○さん、すずめの赤ちゃんを見つけたよ。連れて帰ってみて。

<役割演技をさせる>どんな歩き方？どこ見てた？

・両手で持ってるよ

・大事に持ってるよ。

・そっと歩いてるよ。

※世話をすると発言した児童には、すずめを見つけ、家まで運ぶ動作化をさせる。その後、気付いたことを発表させる。(例：大事に運んでいた。揺れないように運んでいた。目線はすずめ。寒くならないように。)

#### (2) ねらいの設定について

指導教員と指導案を作り、資料を読み込んでいくと、私の指導したい児童の実態と、ねらいにずれがあることが分かってきた。

##### ① 8月22日に作成したねらい（指導案より）

ねらいは、3-(2)「生きることを喜び、生命を大切にすることを学ぶ」である。

資料に即したねらいは、「赤ちゃんの頃から世話をし自分になついているすずめを可愛がることが、自分本位の可愛がり方であったことに気づき、自然の中の生き物であるすずめの立場に立って考えていくことが生命を大切にすることだ」という心情を養う」である。

指導書の3-(2)の項目である「生命尊重」として取り扱おうとしていた。

##### ② 9月19日に送ったメールより（抜粋）

当初3-(2)の項目として指導案を作成していたが、指導したい内容が3-(1)「動植物愛護」なのではないかと考え、相談した。

「すずめの赤ちゃん」についてですが、「生き物の立場に立って（気持ちを考えて）育てていくことが大切だ」という指導したい内容が3-(2)ではなく、3-(1)なのではないかと価値項目が違うのではないかと思いました。

先生は、どのように思われますか。

### ③ 9月20日質問に対する指導

9月19日の質問の答えを下記の通りいただいた。

「生き物の立場に立って（気持ちを考えて）育てていくことが大切だ」という指導したい価値内容が3-(2)ではなく、3-(1)なのではないかというご指摘ですが、私もそう思います。といいますか、初めの雀の赤ちゃんを拾ってくる場面では、「生命を大切に作る心をもつ」という3-(1)の価値項目であったものが、次の雀の赤ちゃんを飼育をする場面では、新たに「生き物の立場に立って育てる（考える）」という3-(2)の価値項目と関連していくのだと思います。

ある意味では、「雀の赤ちゃんを拾って来て人間のもとで大切に育てるべき」という価値観が、「雀の赤ちゃんを人間から解放してあげるべき」という価値観と対立・葛藤してくるわけですね。

子どもたちが、単に飼育すればよいというシンプルな価値観から、保護・介抱して回復した後は自然に帰すべきという高次の価値観へと考えが発展することを期待しているのだと思います。

亀谷先生としては、後半場面で3-(2)の高次の価値項目を指導されたいとお考えのようですから、そこに焦点を絞ると価値が混乱せず、よい授業になるような気がします。

終末に児童の姿を紹介する、バッタの飼育や開放に関しても、同様のことが言えると思います。

### ④ ねらいの決定について

このようなやりとりから、下記のねらいを設定した。

ねらいは、3-(1)「身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する」である。

資料に即したねらいは、「赤ちゃんの頃から世話をし自分になついているすずめを可愛がる」ことが、自分本位の可愛がり方であったことに気づき、自然の中の生き物であるすずめの立場で考えていくことが本当に生き物を大切にすることだという心情を養う」と設定した。

## 4. 授業の実際と事後指導について

10月4日に「すずめのあかちゃん」の授業を行った。指導教員が来校し、授業参観と事後指導をしていただいた。

以下に指導案作りで多く指導いただいた発問をA男を抽出児として授業の様子を紹介する。ま

た、事後指導もあわせて紹介する。

(1) 授業の実際について

9月に生活科の「いきものとなかよし」の学習で公園にいるバッタを捕ることがあった。A男は二匹捕まえ、そのバッタを自宅へ持って帰った。数日後、保護者にその時のバッタをどうしたのかをアンケートした。母親からの回答で、A男は捕まえてきたバッタ二匹を戦わせて遊び、弱ってきたのでかわいそうに思い逃がしたという。



**展開前段**

T (すずめの赤ちゃんのぬいぐるみを床に置く。) すずめの赤ちゃんを見つけたよ。どうしよう。

C かわいい。えさをあげる。連れて帰って面倒を見る。(口々につぶやく)

T どうやって連れて帰るのかな。やってみて。

A男 あっ、すずめの赤ちゃんだ。連れて帰ろう。(スズメのぬいぐるみの首を指でつまんでドタバタと歩き出す。)

C かわいそう。かわいそう。(つぶやき)

T なにかかわいそうなの。

C 片手で持ってたけど、両手で持った方がいい。大事に落としちゃいけないし。

C こうやって持って帰る。寒くないように。(両手で包む。)

T どんな歩き方だった。

C そうっと持って帰る。ちっちゃいから死んじゃう。

T 目はどこ見ていた。

C 赤ちゃん見てた。揺れないように見てた。

A男の役割演技は、A男の日頃の自分の行動を表出させたものであった。また、問題場面に出会った仲間の演技と自分とを比較することで、自分の感じ方・考え方を自覚する手がかりとなった。

この様に、問題解決型の発問を取り入れ、事前にねらいとする価値に対する価値観や行動規範を把握することで、道徳の時間に表出したい感じ方・考え方を意図的に出すことができた。





また、A男以外の児童は、今にも消えそうな生き物の命を扱うときに、暖めながら、ゆっくりと歩き、じっと生き物を見ながら歩く役割演技をしていた。A男に役割演技を見る視点を与え、仲間とかかわることで、仲間の感じ方・考え方を知り、自分の価値観を終末、以下のように深めていくことができた。

T 悩んでいる私にお手紙を書いてあげよう。

B男 ピーも群に帰りたいたいと思ってるよ。ピーも外で遊びたいと思ってるよ。お父さんやお母さんを捜しているんだよ。帰してあげよ。

と、ワークシートに書いていた。生き物の立場に立って考えなくてはいけないというねらい通りの記述があった。A男は問題解決型の発問で、自分自身を見つめ、仲間とかかわり合いながら感じ方・考え方を深めることができたと感じた。

また、本授業では、下記のような深めの発問をする場面もあったので紹介する。



T 私は、りかちゃんに「外でスズメのみんなと遊べないからかわいそう。」って言われたよ。その時、私はどんなことを思っただろう。

C どうしよう。みんなと遊びたいのかなあ。

C 鳥かごから逃がしてあげた方がいいのかなあ。

T ちょっと待ってよ。みんな逃がしてあげようかなって言うてるけど、私は一生懸命世話したよね。えさあげて、ベッド作って、かごにも入れてあげたよね。なのにかわいそうなの。

C 鳥かごはかわいそう

C だってピーは、外で遊びたいけど遊べないから。

C ピーは、鬼ごっこしたいって思ってる。

C みんなと遊びたい。お母さんに会いたい。

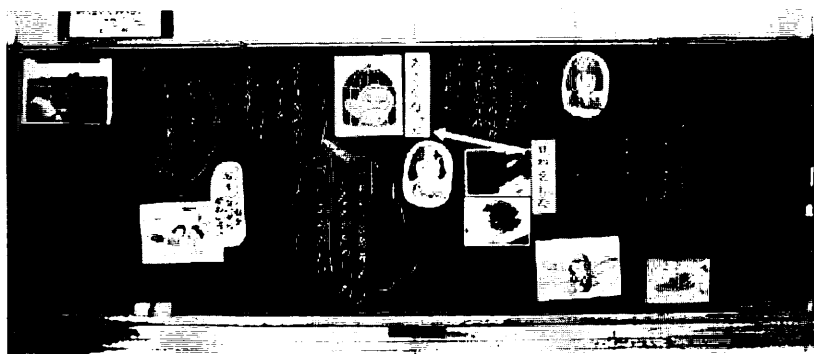
T この時、「ピーは、」ってピーの気持ちを考えたんだね。

この様な「深めの発問」をすることで、逃がしてあげるのは、ピーの気持ちを考えたからとさらに価値を深めることができた。しかし、さらに子どもの心に強く意識させるために、次のような「深めの発問」をした。

- T 逃がしてあげたいって気持ちと、ずっと一緒にいたいって気持ちはどっちが大きいのか？
- C 逃がしてあげた方がいい。
- T どうして？
- C やっぱり、ピーだってみんなと遊びたい。
- C ピーだって、お母さんに会いたいよ。
- T ピーだって、「～したい」って考えたんだね。



「深めの発問」をすることにより、ねらいとする価値に対して表面的な部分で流れていた子どもの感じ方考え方を、さらに掘り下げたり、強く意識させることができた。



「すずめのあかちゃん」の板書写真

## (2) 事後指導について

### ①授業者のふり返り

この授業を振り返ってみて、りかちゃんの「外でみんなと遊べないからかわいそう。」という言葉で、「私が外でみんなと遊べないからかわいそう。」「みんなを人間。」ととらえる児童が多かったと感じました。

授業中、「カゴを外に持っていけばいい。」とつぶやく児童の言葉が聞こえましたが、それを「ん!？」と思いましたが、流してしまいました。

そこで、「どうゆうこと？」と聞き返せば、「スズメのピーちゃんがかわいそうなんだよ。スズメのみんなと遊びたい」と補えたと感じました。あの時、心のゆとりがもっとあればと反省です。まだまだ、経験不足、指導力不足だなと感じました。

### ②指導教員の指導

先日の授業は、子どもたちの生活経験に基づく生き生きとした言動を巧みに引き出されながら、道徳の問題解決をロールプレイなども有効に活用されて展開した見事な授業だったと思います。あのような授業をオリジナルで構想された亀谷先生には本当に感心させられました。

たしかに亀谷先生が指摘されているように、よく注意して子どもの話を聞いていくと、何人かの子どもは「りかちゃん」と「すずめのピー」の気持ちを誤解して読んでいる様子が窺えます。

授業後にその点を指摘されていた先生もいらっしやったので、私も少し気になっていましたが、こうした言動に残り少ない授業時間で対応するのは大変だったと思います。資料の前半をロール

プレイで丁寧にやった分だけ、後半の資料の読み取りで少し気が急いだのかもしれませんが。

今回の資料は、特に物語の展開における主語が誰のものなのかがポイントになったと思います。子どもたちにとって、「りかちゃん」の気持ちになるのは比較的簡単でも、「すずめのピー」の気持ちになるのは結構難しかったのかもしれませんが。「すずめのピー」の気持ちをじっくり考える時間がもう少しあると、ワークシートの記入も少し違った内容になったのかもしれませんがね。「問題解決型」にした場合、子どもたちが生活経験をもって主人公に強く同化できる分、資料の読み込み（すずめのピーの気持ちの読み取り）が少し不足しやすいのです。この点は、私自身の検討課題にもさせていただきたいと思っています。

それはともかく、こうした細やかな点も丁寧に観察され反省的に実践を続けられる亀谷先生のお姿も素晴らしいと思います。

## 5. 成果と課題

- 児童の発達課題を理解し、学校生活におけるいじめや友人関係といった道徳的問題を解決していく道徳教育の理論と方法を学ぶことができた。また、児童が自ら課題を発見し、内省を深め、問題解決できるような道徳授業を構想し実践することもできた。
- 問題解決型の道徳教育の指導案を作成、実践することで、多様な道徳教育のあり方を探究することができた。
- ◇資料の主人公の生き方や学級の仲間、自己の経験等とかかわりながら、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育てる道徳の時間の在り方を一層探求していきたい。

## 6. おわりに

今まで12年間の実践を振り返る中で、自分の授業観や子ども観を見つめ直すことができた。講義の中で、自分の持ち味や実践課題をとらえ、表現し、他の教員との意見交流を行ったことは、今後の実践をより高める手がかりをつかむことができたものであった。

指導教員からの単なる一方的な情報提供に終わるのではなく、自分自身の問題追究を重視した講義であったこと、これまで魅力や必要を感じつつも実践に踏み切れずにきたことに取り組むことができたことに感謝したい。